

文芸用語としての〈真理〉のスペクトル

——坪内逍遙の文学論における「真理論」の言説編成の背景をめぐって——

鄭 炳 浩

一 はじめに

坪内逍遙は明治二十年（一八八七）一月二日付の『読売新聞』で、「小説の厄連」（同新聞、一月一九日）と題された白雪山人という人物の記事に反駁し、「美術ハ（中略）真理人情を写す者なりとハ斯申す隠居と我友冷々亭主人（二葉亭）の外に何時ごろ誰人が唱へたるぞ」と述べている。この言説は明らかに、「真理」を「文学の中心に据えたのは自分と四迷が嚆矢であるという誇りの餘」²さを示すと同時に、「真理」という概念そのものが文芸用語としての一面を占める可能性をも示唆している。

実際、明治二十年前後、〈新文学〉の領域を切り拓いてゆこうとしていた文学者たちは、この「真理」という用語から単なる文学論の言説編成の可能性を見つけ出そうとしたばかりではなく、積極的にその概念をその言説編成の中心（主題）に位置づけようとした。例えば、逍遙が『小説神髓』を完刊してまもなく、その「美術（芸術）論」の美学思想を移行して新たな概念を模索し構築しようとした際、その中核となったのがまさしく「真理」や「妙想」という概念であった。逍遙だけでなく、この時期におけるこの類の文学評論に眼を配ると、「真理」という概念は、二葉亭四迷の文学論³を先魁として、当時、数多くの文学者によって用いられていたことがわかる。その中でも「小説家の責任は既に真理を發揮するにあり」⁴や「人間生活の現象を推櫛觸玩して、現象以外に無形の真理を發揮し、若くは現象よりも一等進歩したる世界を反映するは、詩人の妙技なり」⁵という言説が当時の文学界の事情をよく示しているといえよう。

だとすれば、当時の文学論で「真理」という用語が文芸用語の一つとして頻繁に用いられるようになった理由はどこに

あるのだろうか。さらに、その状況に深く入り込もうとする場合、その「真理」という用語を用いるに到った〈知〉のありように、同時代の動向がどうかかわっていたかを考えなくてはならない。本稿の論述の枠をこのような範囲と問題点に限定する場合、この時期の文学論をめぐる問題に対して、先行研究ではほとんど追究されていない。特に『小説神髓』以降二、三年のあいだ、逍遙の文学論におけるキーワードであった、この「真理」の時代背景を考察した論は、△二葉亭の影響とといった概論的な言及を除くと皆無に近いといつてよい。ただ、石田忠彦は、逍遙が「文学の美を美の真理として把握」しているとする「真理の美」という概念に注目し、「美が真によつて根拠づけられてはじめて存在する美的概念である」と定義づけていることが唯一注目される。それでも、氏は、その「真理」を文学論の言説編成の主題に構築することとなる時代的コンテクストや、それを支える〈知〉のありようをめぐるはまったくふれていないのである。

したがって本稿は、明治二十年前後において「真理」を言説編成の中心に据えようとする逍遙の文学評論群に焦点を当てる。その方法論としては、その理論を支える〈知〉のありようを同時代的コンテクストと対照することによつて、その「真理」という用語が孕んでいる役割と時代的意味性を考察する。

二 「智の文」と「情の文」への視線 — 美と真理の概念をめぐる —

逍遙は評論「文章新論」（明治一九年五月）で、「文章の目的」とは「心の働きを表出して他人にしらしむる」ところにあるという論旨から、その「心の働き」という規準によつて文章を「智・情・意」の文で三分している。その三種の文とは、次の三つの範疇である。

- (第一) 真理を研究し確定し若くは講説する者（即ち所謂散文并に真理を講説せる韻語体の文）
- (第二) 専ら感情を吐露する者（即ち所謂詩歌并に詩歌とその旨を同うせる散文）
- (第三) 願望企図を發表して他人の賛同を希望するの意に出たる者（即ち所謂△Cretora弁論文）。

さらに逍遙は、(第一)の文は「智力の領分」として「學術上の著述歴史伝記」のジャンルを、(第二)の文は「情緒の領

分」として「詩歌伝奇戯曲小説」のジャンルを、(第三)の文は「意想の領分」として「すべての弁論」のジャンルをそれぞれ指していると敷衍している。この範疇の認識は、文学の文章を一つのジャンルとして取りあげ、他ジャンルの文章と対称的に定立し、文章のジャンル意識の成立を告げているという面で、当時の「文章論」の中でも示唆するところが大きいといえよう。逍遙はこの認識の延長線上に立って、『美辭論稿』では「美文学」といふ名目は情の文の名称たるに称へり」と言い切った上で、「情の文は美を其の理想とする文章なり之れを美の文と呼ばんこと恰当なるべしさて之れに對して智の文をば真を表極とする文なるゆゑに真の文と呼び又意の文をば善を表極とする文なるゆゑに善の文と呼ぶ」¹⁰⁾ことを提言している。

このような概念による分類は、文学を「美」的なもの、人間の「情」を表すものだという逍遙の一貫した論旨によるものである。その概念化を通して、学術的著書や弁論および演説文など人間の知的営為を表す文章と「詩歌伝奇戯曲小説」を対等に位置付けているという面で、その文章論の含む文学史的な価値が指摘できよう。というのも、当時、△文学と自然「論争」として知られている、巖本善治の一連の評論の中にある「完全したる『真』は亦た『善』なり『美』たらざるべからず」や、「真善美」は「渾全同一軌にあらざる可らず」という論調が示しているように、学問・科学的な「真」や道徳的な「善」を文学のめざす「美」の追究と同一視する見方が、いまだ根強く存在していた時代だったからである。

このような思潮にあつて、『経國美談』(明治一六年)の作者、矢野龍溪もいち早くその上篇の「自序」で小説のありやうにふれている。

世人動モスレバ輒チ曰フ、稗史小説モ亦タ世道ニ補ヒアリト。蓋シ過言ノミ。若シ夫レ真理正道ヲ説ク者、世間自ラ其書アリ。何ゾ稗史小説ヲ飯ルヲ用キ。唯身自ラ遭ヒ易カラザルノ別天地ヲ作爲シ、巻ヲ開クノ人ヲシテ苦樂ノ夢境ニ遊バシムルモノ是レ即チ、稗史小説ノ本色ノミ。故ニ稗史小説ノ世ニ於ケルハ、音楽曲ノ諧美術ト一般、尋常遊戯ノ具ニ過ギザルノミ。是書ヲ讀ム者亦タ之ニ遊戯具ヲモテ、視ル可キナリ。¹¹⁾(強調は引用者)

龍溪はここで、小説が「世道」の役割を果たすとか、読者に対して「正道」へと導くという功利的な小説観を否定し、小説を音楽や絵画と同じく「美術」の領域に位置付けて、その役割が「遊戯」の道具であることを語っている。この龍溪

の認識は、「小説」および「美術」について「実用の技にあらねば、只管人の心目を娯ましめて其妙神に入らんことを其『目的』とはなすべきなり」という、『小説神髓』における逍遙の小説論をあたかも先取っているかのようにも見える。

当時の〈小説改良〉という動きと連動するかのような龍溪の論で興味深いのは、「正道」「世道」という倫理的な要素を小説から排除しようとする試みとともに、学問書や科学書が孕む知的要素である「真理」をも小説の役目から切り捨てようとする試みをしていることである。すなわち、倫理的な「善」や学問的な「真理」を具現するジャンルの書物と一遊戯の具」としての「美術」のジャンルを峻別し、「小説」の自立性を追究しているといえよう。

この姿勢は、例えば「現に我が日本にて翻訳となり発売する露国虚無党退治奇談又は春驚囀の類の如きは殆んど普通政論の訳書を読むの効力に勝るものあるを覚ゆるぞや」という観点から、その類の小説を「學術小説」と呼んでいるように、小説を実学あるいは実用的手段として認識している側への批判だといえよう。

ところで、『小説神髓』以降の逍遙の文学評論に注目すると、以上で概説した、いわゆる「真理」という概念が、彼の小説文学論、ひいては芸術一般論を説明するキーワードとなつていくことがわかる。実際、その代表的な箇所をあげると、次のようになる。

① 夫小説家の本分といつば、天下の真象と真理を探りてこれを活たやうに描くにある

② 若夫小説家と申すものは単に人情の秘蘊を穿ちて真理(Truth)のある所を示し

③ 小説は之に反して影なき形なき真理を写して之を活動して示すべきものなり故に外形の美麗と新奇は決して重立たる事にてはなし

④ 之を要するに伝奇の主髓ハ言ふに言はれざる美妙の真理を妙に活動して示すにあるゆゑ外部が如何ばかり高尚なればとて所謂人情の真理に違はゞ絶て値のなき者ともなるべし

⑤ 然るに演劇の目的たる元來人情の真理を写して之を活動して見するにあるゆゑ仮にも人情の真理に違はば如何に其外部が面白からうとも如何に其脚色が珍らしからうとも最早大抵ある片輪者なり

⑥ 嗚呼滑稽ハ美術の一部門なり美術ハ真理をもて目的となす故意と人工とハ美術の外道なり(番号は引用書の付け)

これらに共通する思想はいずれも、「天下」の物事から「真理」を探り出し、小説や芸術作品に写すところに「小説の目的」があり、「小説家の本分」があるということである。そして、その「真理」を捉えているかどうかが小説の価値を決

定する規準となるため、「外彫の美麗」や「脚色」は副次的な問題となつてゐる。このように「真理」を小説（美術）に当て嵌めようとした場合、「真を表極とする文」としての「智の文」における「真理」と、小説（美術）における「真理」はいかにして対応するのか、というその關係性が問題となる。もちろん、このような「真理論」で論じられてゐる「真理」とは、『小説神髓』以来、一貫して小説の対象であつた「人情」の「真理」であつて、「智力の領分」としての「真理」を意味してはいない。とはいへ、「人情」の「真理」も、ある対象に求める「真理」である以上、それは知の作用をおし見付けた「真理」と、果たしていかなる差異があるのだろうか。「智の領分」と「情の領分」を明瞭に峻別していた逍遙にとつて、その疑問が解かれない限り、この「真理論」による文学論の言説編成には、ある意図が秘められてゐるといわざるをえないだろう。

まず、逍遙における「真理」という概念の形成には、冒頭で引用した「美術ハ（中略）真理人情を写す者なりとハ斯申す隠居と我友冷々亭主人」であつたという言説が示唆するように、二葉亭との交友からうけた、二葉亭の「真理論」の影響があつたといえよう。たとえば、次の文章は、二葉亭との關係をよく物語つていよう。

皇国の小説家は偽物が多くて、所謂道楽家の化物なる（中略）随分勉強して觀察を旨とし、暗に哲學者の片腕となりて、真理を拾ひだが本分ぞかし。稗官は感覺の力をもて、妙に真理を窺見すとは、魯の美學家の名言なり。¹⁴

逍遙の新たな文学論の言説編成は、小説における描写の中心に「真理」を位置づけようとしてゐるのだが、その背景には二葉亭をとおしたロシアのペリンスキーの文学論、あるいは二葉亭の文学論そのものの影響があつたとみるべきだろう。この影響關係は「ペリンスキーの『神的イデー』は二葉亭で『真理』となり、逍遙で『智』となつた」というように指摘できようが、その際、施された用語のすり替え、あるいは文学論におけるその概念の再編成は、彼らの位置してゐる時代の背景によるものであろう。結論からいへば、この概念の変容は、やはり逍遙が「情の文」における「美」と対称的に分類してゐる、学問における「真理」と深く関わつてゐる。その關係は、以下、考察することにする。

三 「真理」という概念のありよう ―学問の「真理」と芸術の「真理」―

逍遙のいわゆる「真理論」は、『小説神髓』以降、様々な新聞・雑誌に載せられた評論の随所に見られる。それらによると、その「真理」は「人情の真理」「世態の真理」、あるいは「美の真理」「美妙の真理」と限定されているように、「人情」「世態」「美」の領分における「真理」であった。この「真理」を限定する概念が示している範疇は、小説芸術がどのような対象から「真理」を求めらるべきであるかをうかがわせているといえよう。すなわち、小説に描かれるべき対象として「人情」「世態」「美」が位置しているのだが、この考え方は『小説神髓』の「人情・世態論」「美術論」の残影ともいってよからう。

ところで、「人情」「世態」「美」というキーワードを中心とした逍遙の文学論が、新たに「真理」という概念を介して組み立てられている理由はどこにあるのだろうか。その言説の再編成にこそ、『小説神髓』以降における逍遙の新たな文学論のありようが見い出せると考える。もちろん、前で見たと同様に、逍遙の「真理」の受容は二葉亭の影響から端を発したといえようが、それが用いられている次のような文脈をみると、彼の文学論で「天下の真理」「人情世態の真理」「美妙の真理」「影なく形なき真理 (Truth)」といった概念が、どのような役割を果たしているのかが読みとれる。

①而して人間は有形の学問より先づ初めて、段々に知識を増した。(中略) 人間は外に形のない学問を調べねばならぬ。是れ即ち哲学(一般を指す)の進歩して来る道理である。社会学、心理学、純粹哲学は皆学問の道理を知るのである。(中略) 之を要するに、哲学は世の中の無形の真理を解剖して、殺して見せるものである。然るに美術は其真理を引きくるめて、生きたところをあらはすものである

②科学と美術とは其目的を一にす、共に真理を知る方法ではあるが、一は知識を以てし、一は感覺を以てす、是相異なる第一なり

③美術ハ感情を以て真理を感得し哲学ハ知力を以て真理を知ると然らんにハ美術ハ飽くまでも知力を離れて働き得るものにてあらざれば叶はずさる

④故に遊人ハ批評するに臨みて「小説の要は哲学の講究し得ざる真理を發揮するにあり」といふ事を以て終始の標準となすべしと思ふ(以上番号は引用者の付け)

以上の言説群をみる限り、「真理」という用語はいずれの場合も共通の文脈で用いられていることがわかる。すなわち、「科学の真理」／「美術の真理」、あるいは「哲学の真理」／「美術の真理」という対項が示すように、その文脈は「美術の真理」を学問上の「真理」と照らし合わせて普遍的で究極的な根拠を導き出そうとする機能を果たしている。したがって、その文脈から判断して、「美術の真理」とは、「哲学」（人文科学）、もしくは「科学」（自然科学）における知の根源である「真理」を意味しているといえる。というのは、「小説」や「美術」上の「真理」がつねに学問上の真理、すなわち評論「美とは何ぞや」の用語を借りるならば、「実用」的学問の真理と同様の位置に定位されていて、その二つの領域がともに「真理」を追い求めるという意味で同一の目的を共有すると措定されているからである。

もちろん、逍遙はそれぞれにおける「真理」を探究する際、その方法的差異を明確に区別している。例えば、「学問」の場合には「知力」や「知識」を介して、その対象を「解剖して」「真理」を穿鑿するが、「美術」のほうは「感覚」や「感情」を介して、「直接の観察」を通して「真理」を「感得」するというのである。しかし、ここで「知力」／「感情」とは、あくまでも「真理」探求の手段であって、「美術の真理」は、実際「学問上の真理」と同様の役割を果たし、ともに至るべき共通の目的とみなされている。それゆえに、逍遙が学問上の真理と美術上の真理を捉える方法の差異を明示するかのように見える右の文脈には、むしろその差異性というよりも共通の価値性が見出されるといえよう。すなわち、「小説の要は哲学の講究し得ざる真理を發揮するにあり」とか、「道徳の真理、政治の真理、之を討究する必要ありとせば、美の理も講究せで叶ふべからず」という言説がうかがわれているように、芸術における創造が学問の研究と同価値をもつものだという認識である。

実際、当時の啓蒙思想を始めとして、欧米から輸入されたばかりの〈諸学問〉について論及する言説を見ると、探究の究極的な対象、すなわち〈知〉の根拠を「真理」(眞理) という用語で把握していたことをここで想起してもよからう。この「真理」という概念こそ、明治初期における富国強兵という政治的スローガンと相俟って、欧米の「学問」を積極的に奨励する側においても、その実学的な価値を説明するキーワードとなっていた。例えば、次の言説がそれにあたる。

①学は知ることの積み重なりなりといふとも、惟だ徒らに多く知るを以て学問となすにはあらず、何事にもあれ、其源由よりして其真理(眞理)を知るを学となすなり、(中略)故に学者専ら講究し、物に就て真理を極めざるべからず。それを講究して其真理を知るときは開物成務、厚生

利用、又孔子の語に飽食暖衣逸居の処に至るも亦容易なりとす

②抑々学問ナルモノ、庸旨ヲ如何ト纏スルニ畢竟天地間事物ノ真理ヲ究明スルノ外ニ出テサルヘシト信ス果シテ然ラハ学問ナルモノハ決シテ時代ト場所トニ応シテ変スルモノニハ非サルヘシ(中略)学問ハ斯ク科目コソ多ケレ要スルニ皆上ニ云ツ事物ノ真理ヲ分業シテ教フルニ過キ入¹⁸

③理学者ハ惟宇宙間何ニテモ真理ヲ発見スルヲ目的トシ、其実地ニ効用有ルヤ否ヲ問ハズト雖、真理ヲ発見シ知識ヲ広ムルハ一トシテ早晚実地ノ利益ヲ生ゼザルコトナシ

④學術は真理なり(中略)学問上の真理といへば、一定不変の物を指す(中略)教法上に至りては、その真理の分は人心世道を利益する最用最重のものなり

この言説群は、たんに多くのものを知ることを学問とみなす見方を退け、学問の定義と目的を「真理」という概念によって定位している。そして学問の目的である「真理」にたどり着いた時には、その究明された「真理」は必ずや「開物成務、厚生利用、飽食暖衣逸居」といった実学的な経済的「利益」、もしくは「人心世道を利益する最用最重のもの」、すなわち民衆がみずからを秩序づける倫理・道徳が与えられると認識していた。彼らの主張する「学問」とは、まさに「真理」という用語をとおして、国家・社会・人間の行為に対して「実用的」で「効用的」な実益をもたらすものとして奨励されたのだ。当時における近代国家建設を実現するための手段として、彼らはみずからの「学問」を「実用学問」として位置づける必要があったのである。

『小説神髓』以降の逍遙の文学論がこのような時代思潮のコンテクストを背景とした「哲学」(人文学)や「科学」(自然科学)に属する「真理」を取り込もうとしていたことは、彼の文学評論が時代思潮に敏感に対応する言説編成だからであって、それによって小説を文化の一領域に定位しようとした何よりの証しだといえる。文学芸術における美の实在をこの学問上の「真理」と同位するところに、二葉亭の「真理論」と同じく、明治二〇年という時代に位置した逍遙文学論の特徴がよく浮き彫りにされている。この時期における逍遙の文学評論は、「感覺」によって人情・世態を穿鑿する「人情世態の真理」という学問を目指していたともいえよう。

だとすれば、逍遙が「学問の真理」と照らし合わせて、模写対象としての「美術」の「真理」といった概念を理論的に定立することとなった理由はどこにあるのだろうか。言い換えれば、逍遙が「美術」上の模写対象を学問上の「真理」と

いった概念に求めるに至つた理由はどこにあるのか。この背景を考察するために、「真理」に関する次の言説群を見ることにする。

① 已に先日にも私に向つて、美術を修むるは、果して何等の利益がある、と真面目で問かけた男があります。さう実利ばかりに凝固ッチャア、まるで論談ができませんテ。科学と美術とは其目的を一にす、共に真理を知る方法ではある

② 予ハ実用主義を奉ずる者なりと公言して政治経済を問ハズ美術文学を論ぜず苟も著述とさへ言ハバ一概に之に攪りて判断し去り苟も実用に背く者あれば之を非なりとして排斥なし敢て何故に実用主義が人間唯一の目的なるやを明証せんとしも企てざる者の如きまづ一例となすべきなり

③ 殊に一口に「美」といふ時には「虚飾」といふが如き観ある故、哲学界中にあらざる限は之を無用なる贅物のやうに思ひて、他の実利上の真理程には緊要大切な者とも思はず、(中略) されども退いて考ふれば「美」も亦此宇宙内の真理にして、其真理たるの価値よりして言はゞ絶えて他の真理に劣るべうもあらず。(中略) 道德の真理、政治の真理、之を討究する必要ありとせば、美の理も講究せて叶ふべからず。敢て実利上に関係して扱て愛するにはあらざるなり。されば其真理の何たるを問はず、其真理たるの位は一なり。(中略) 宜しく万般の真理を一視し、(中略) 絶えて其間に愛憎なく、あらゆるもろくの道理をして完全せしむるやう力めずては叶はじ。¹⁹⁾

この言説群には、逍遙が文芸の中心に「真理」を定立する際、なぜそれを〈実用学問〉の知の根拠である「真理」と同位させているのかが明らかにされている。これら言説群は、「美術」と「学問」で究極的にたどり着くべき対象がともに「真理」である限り、それぞれの「真理」は等価だという論理であつて、「美術上」の「真理」が「実用学問」に比べられても、それほど価値が劣らないという事実を証明するためであつた。とりわけ、逍遙は前で考察したとおり、〈実用性〉〈効用性〉にもとづく〈実用学問尊重〉の時代的思潮を強く意識し、「科学と美術とは其目的を一にす、共に真理を知る方法で」あるとか、「美」も亦此宇宙内の真理にして、其真理たるの価値よりして言はゞ絶えて他の(実利上の)引用者注) 真理に劣るべうもあらず」というように、「真理」を介して「学問」と「美術」の等価性を唱えている。このような主張には、確かに「小説」が〈実用的〉〈効用的〉でないという認識を乗り越えようとする意図と「美術」の一ジャンルとして小説を一つの「学問」として築こうとする姿勢が秘められている。その背景として、小説を含めた美術が無用の「虚飾」とみなされたため、そのような認識に歯止めをかけ、小説(美術)も「学問」の「真理」と等価値の「真理」を孕んでい

る事実を証明しようとする意図があった。だからこそ、逍遙は当時学問上の用語であった「真理」「美術」の中心に位置つけたのだ。

四 『小説神髓』から「真理論」へ——「小説無用」という認識への視座——

逍遙はこの「真理論」を構築し始める一年ほど前である明治一八年五月三日日付の『読売新聞』で、三日前同新聞紙上に載せられた次のような「文学無用論」の記事をまのあたりにし、それに強く反発している。

文明の進歩するに従ひ百科の実学ハ益す改良進歩するといへども独り詩歌の學に至つてハ全く之れと相反するなり抑も百科の実学の改進するや容易の事に非らず其材料を集聚して之れを分離綜合するに數代の年月を費さざるべからず（中略）理想の日新する今日に在てハ詩學の困難益す増加して逆も其希望を達する事能はざるべし左れば詩歌に熱心なる志望を他の學芸に移し日進文明の流に沿ふて有益の事業に従事すること今日の急務なり²⁰

この記事の投稿者浅野狂夫は、「詩歌」とは「文明の進歩」する時代である当時に相反するものだという理由から、その「詩歌」に向かう情熱を「実学の改進」といった「有益の事業」へと移し、「文明の進歩」に務めることを奨めている。この記事の「詩歌ハ文明と並進せず」という題が示唆するように、この論は当時の「富国強兵」の政治的スローガンと相俟つて「実学尊重」／「文学無用」を主張する典型的な一例だといえる。このような浅野の論調と軌を一にしている、明治一〇年代のいわゆる「文学無用論」／「実用学問尊重」という時代認識を例示すると、

学問とは、ただむつかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を樂しむ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を言うにあらず。（中略）畢竟その学問（「詩歌」などの文学…引用者注）の実に遠くして日用の間に合わぬ証拠なり。されば今かかる実なき学問は先ず次に、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。²¹

という福沢諭吉の意見に代表的な言説を見出せるが、これはたんに福沢一人の意見ではなく、当時の時代思潮でもあった。

この言説は、明治初期に欧米型の近代化に拍車をかけ、富国強兵といった時代的要請に照応した〈実用〉中心の学問の主張であり、文学が世の中に少しも效用のない「実なき学問」という立場から、文学そのものを斥けようとする〈文学無用論〉である。

一方、その浅野の論文を読んで、強い反発を感じた逍遙は、「詩歌の改良」と題した記事でそのような見方を退けようと努めている。すなわち、「詩歌にも改良の方法あり美術にも進化の次第あるを毫も覺られざるものゝ如し」として浅野の論調を批判し、「美術ハ国家の花ともいふべく実学ハ其葉其枝なり」と主張する。このような論旨の必然として、次のように「美術」「実学」のいわゆる「分業」論を唱えるに至る。

・若し此世界の人間として一向実利をのみ重んぜしめん乎其の性おのづから貪婪に流れ他の高雅なる氣韻に乏しく従つて綽々たる余地なきま、其情醜薄に偏らん歟是もまた固るべからず古今東西の差別もなく求めずして美術の行はる、蓋し人情の自然なるべし今や分業の世の中なり美術家は須らく美術を修め実技家は須らく実益を力め共に協力して国光を増すべきなり人情の実利にのみ偏るは隱居の苦勞にする事なりかし

・未開の世の詩歌（未開の世の小説）の文明の世に行はれがたきに因ることなり然はさりながら詩歌の真面目は敢て荒唐を語るにあらず他の人情を穿つにあり若し荒唐を語るを止めて専ら人情の髓を写さば文明の世の社会なりとて何とて詩歌の行はれざらんや詩歌ハ即ち小説なり小説ハ即ち文明の詩歌なり世の文壇に遊べる人々未開の詩歌の文明の世に衰ふる所以を覺らば宜しく改良の手段と講じて新体の詩歌を修むべきなり

ここで逍遙は『小説神髓』と同じく、進化論の立場から小説の改良を概説するだけに終始し、その「詳細を知らんと欲せば」「小説神髓を見よ」と結論付けている。この逍遙の示唆に従つて彼の理論をたどるとき、果たして有効な反論たり得るだろうかという疑問にぶつかる。小説の社会的位置を高めようとする小説改良への試みは確かに『小説神髓』の中心テーマの一つであった。だが、『小説神髓』では、「小説も非実用的非功利的ではあるが自然の効用をそなえているもの」だという主張、すなわち「小説は政治、宗教、道德等の權威から独立したものであるとして小説の合目的性を排除しながらも、しかし小説には自然の効用があるとしてその有用性を主張する」ところに、「二つの二律背反」があり、論理の「撞着」があった。だから、小説の「実用学問」に対する対価性は、『小説神髓』で唱えられてはいても、その理論化にまで

は到らなかつたと言えよう。それはおそらく逍遙が最も実感したことではなからうか。

しかし、『小説神髓』の「美術論」を大きく変容させた、いわゆる「真理論」に至ると、小説における模写の対象を學問における知の根拠である「真理」と同位させることによって、その対価性への戦略と同時に、その理論化をめざしているといつてよい。それは右の反発の有効性に対する反省の上に立っていよう。その戦略と理論化がまさにこれまで見てきた逍遙の言説であり、「哲学と芸術が—引用者注—相助けて進まんには、人間界に存する何者の真理か、宇内に充滿せる何等の真理か、遂に人間の有為ならざらんや。私は此二つの者共が互に發達せん事を常に希望して止まざるものであります」といった言説である。特に後者の言説には「學問の真理」にする「美術の真理」にして、それらがこの「宇内」の「真理」である以上、ともに人間に「有益」だと唱えるところから「真理論」によって小説の効用性・実用性を論理化しようとしている。この見方は確かに「實用學問」の「真理」にしかその有用性を与えなかつた時代へのアンチテーゼともいえる。

その一方で逍遙は、「真理」による理論化の試みとして、「遊び」として代表されるこれまでの小説に批判を加え、その小説の地位を上げようと努めている。

- ① 皇國の小説家は偽物が多くて、所謂道楽家の化物なる（中略）随分勉強して觀察を旨とし、暗に哲學者の片腕となりて、真理を拾ひだすが本分ぞかし。神官は感覺の力をもて、妙に真理を發見すとは、魯の美學家の名言なり。小説にして大に進まむ歟
- ② 兎角に我國の小説作者は神史を道楽か何ぞのやうに思ひて戯作だとか戯述じやのト妙に無雜作に貶しめて見る（中略）まことに惜むべきの限にてありけり
- ③ 事件ハ小説の主旨にあらず事件ハ歴史家でも書得る事なり所謂小説家の大事がるところハ偏に情態の秘密藏にあるのみ歴史家や伝記家や乃至ハ哲學者が写し得ざる微妙の大真理を描くにあるなりこの事この頃もさる處でよッほど長々しく論じたるに扱ハあれを読んで呉れざりし歟イヤハヤ呆れかへる小説讀者これハ改良もイツカナイカナ
- ④ 元來小説と云ふものは、従前は只遊戯三昧のやうに世人が思惟致して屈りましたところ、近頃になりては、小説も美術の内に加はるやうになりましたゆゑ、已に今日も美術論と云ふ題を掲げおいて、専ら小説に関する事に論及する位で、小説は、繪畫、音楽、彫刻、詩歌杯と同様に、美術の随一に位すると云ふ。²⁵

この言説群をみると、逍遙の唱える小説改良とは、「歴史家や伝記家や乃至ハ哲学者が写し得ざる微妙の大真理を描く」ところにあったと結論づけられる。そのような「真理」を書きえない限り、小説はただ前時代の「道楽」「遊戯三昧」を求め「偽物」にしかならず、「歴史・哲学」に匹敵できる「小説改良」も「適わない」ということである。この意味で、逍遙は〈実用中心〉の学問だけを重んじる時代の風潮に対して、「美術の真理」という論理からアンチテーゼを唱えており、その実践の試みから「遊び」中心の従来の小説を改良する方法として、その「真理論」を提起しているともいえる。その「真理」探究という知的営為にもとづいた「真理」の模写こそ、戯作を中心としたこれまでの小説から脱皮して、新たな文化価値として社会的地位を高め、〈実用学問〉の「真理」と同じく現実の人間一般に役に立たせるといふ主張に至るのだ。

実学尊重の時代に欧米の新文学にめざめた逍遙が、文学に固有の価値を認めるからこそ、この〈文学無用〉という時代思潮を退けることに努めなければならなかった。彼の文学論は、小説詩歌などで象徴される文学無用と実学尊重という時代思潮に逆らい、〈文学芸術〉の価値を〈実用学問〉と同価値の水準にまで高めようとしたのだ。このような時代思潮との対抗というコンテクストにおいて、〈真理〉という語の歴史的意味が認められる。その語を中心概念とする言説編成としての「真理論」は、『小説神髓』の限界を乗り越えようとした位置にあるのだ。

五 むすび

以上で、逍遙が文学論を構築する際、文芸論の中心に据えた「真理」という用語の働きをとおして、その用語に差し込まれている〈実用学問尊重〉／〈文学無用〉といった時代思潮の面影を見付け、その「真理」という用語そのものにこの認識を払拭しようとした戦略が孕まれている可能性を考察した。すなわち、当時〈知〉の根拠を意味すると同時に、実利実益の源泉とされた実用学問における「真理」の文脈により、逍遙の文学論が再編成されるプロセスから彼の理論化における戦略の一面を読み取るうとした。その結果、「真理」のもつ役割は文学と学問の等価値への凝視としてはかりでなく、改良の規準、すなわち前近代の小説から飛躍する手段としても機能していた。このような意味で、『小説神髓』における素材な「人情・世態論」はここに至って新たな転機を向かえ、それが学問と等価値の位相をもつ方向へと定立されること

となったといえよう。

また一方、この時期における逍遙の文学論に注目すると、この「真理」とほぼ同様の意味で「妙想」という言葉も彼の文学論のキーワードとして用いられていた。これまで考察してきた「真理」という概念を考える場合、この「妙想論」もそれと密接に関わっていると考えられるが、その考察は別稿で詳しく分析してゆきたい。

注

- (1) 坪内逍遙「ヤヨ喃暫らく、白雪山人に物申さん」『読売新聞』、一八八七年一月二。
- (2) 石田忠彦「坪内逍遙研究」、九州大学出版会、一九八八年、二三三頁。
- (3) 拙稿「〈虚〉の文学から〈実〉の文学への凝視——二葉亭四迷の文学論における「真理論」の成立の背景——」筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』第29号、一九九九年八月参考。
- (4) 嵯峨の屋おむる「小説家の責任」『近代文学評論大系』二、角川書店、一九七二年、八四頁（初出誌と初出年は『しがらみ草紙』、明一八八九年一月）。
- (5) 石橋忍月「想実論」『近代文学評論大系』一、一三七頁（初出誌と初出年は『江湖新聞』、一八九〇年三月二六日）。
- (6) 二葉亭と逍遙の交渉をめぐった先行論で、この「真理論」の影響を論じていてもその役割に関する論は概説的な説明に止まる場合が多い。
- (7) 石田、前掲書、一六六頁。
- (8) 坪内逍遙「文章新論」『中央学術雑誌』第二八号、一八八六年五月、二頁。
- (9) 坪内逍遙「美辞論稿」『早稲田文学』第三七号、一八九三年四月、二一—二三頁。
- (10) 巖本善治「国民之友第五十号における『文学と自然』を読む、を讀読す」『女学雑誌』第一二二号、明治三年五月八日、十六頁。
- (11) 矢野龍溪「経国美談上篇」の自序、明治一六年。
- (12) 烏々道人「政治小説の効力」『近代文学評論大系』一、角川書店、一九七一年、二六頁（初出誌と初出年は『自由燈』、一八八五年五月二八日）。
- (13) ①坪内逍遙「内地雜居未来之夢」『逍遙選集』、第一書房、一九七七年、六七—三頁（初出年は一八八六年）。
- ②坪内逍遙「式亭三馬評判」『近代文学評論大系』一、四—四頁（初出誌と初出年は『中央学術雑誌』、一八八六年五月）。
- ③坪内逍遙「柳亭種彦の評判」『中央学術雑誌』三四号、一八八六年八月、五〇頁。
- ④坪内逍遙「河竹黙阿弥翁に告ぐ」『読売新聞』、一八八六年二月一四日。

- ⑤坪内逍遙「河竹翁よ乞ふ脚色を重んずる勿れ」『読売新聞』、一八八六年一月二日。
- ⑥坪内逍遙「妄に談話を事とする勿れ」『坪内逍遙研究』(石田忠彦の「附。文學論初出資料」、四〇二頁(初出誌と初出年は「中央學術雜誌」、一八八六年二月二日)。
- (14) 坪内逍遙『内地雜居未來之夢』、六七四頁。
石田、前掲書、二五六頁。
- (15) 坪内逍遙「美術論」『明治文化全集第一二卷』、日本評論社、一九二八年、五五八―五六〇頁(初出誌と初出年は「中央學術雜誌」、一八八七年一月二五日)。
- ②坪内逍遙『内地雜居未來之夢』、五六三頁。
- ③坪内逍遙「未來記に類する小説」『読売新聞』、一八八七年六月一五日。
- (17) 坪内逍遙「雪中梅(小説)の批評」『附。文學論初出資料』、三八二頁(初出誌と初出年は「學芸雜誌」、一八八六年一〇月五日)。
- ①西周「百學連環」『日本近代思想大系14 科学と技術』、岩波書店、一九八九年、五五―七〇頁(初出年は一八七〇年)。
- (18) ②加藤弘之「何ヲカ学問ト云フ」『學芸雜誌』第一六卷、一八八五年四月、四八八頁。
- ③菊池大麓「理学之說」『日本近代思想大系14 科学と技術』、二二六頁。
- ④中村正直「漢学不可廢論」『明治文學全集3 明治啓蒙思想集』、一九六七年、三二八―三二九頁(初出年は一八八七年五月)。
- (19) ①坪内逍遙『内地雜居未來之夢』、五六三頁。
- ②坪内逍遙「批評の標準」『附。文學論初出資料』、四三三頁(初出誌と初出年は「中央學術雜誌」、一八八七年九月一五日)。
- ③坪内逍遙「美とは何ぞや」、三六八―三六九頁。
- (20) 浅野狂夫「詩歌ハ文明と並進せず」『読売新聞』、明治一八年五月一〇。
- (21) 福沢諭吉「学問のすすめ」『日本現代文學全集2』、講談社、一九六九年、八頁。
- (22) 坪内逍遙「詩歌の改良」『読売新聞』、一八八五年五月一三日。
- (23) 石田、前掲書、四一六頁。
- (24) 関良一「逍遙・鷗外考証と試論」、有精堂、一九七一年、一〇八頁。
- (25) ①坪内逍遙『内地雜居未來之夢』、六七四頁。
②坪内逍遙「柳亭種彦の評判」『中央學術雜誌』第三九号、一八八六年一〇月、三〇頁。

- ③坪内逍遙「投書欄を借用して妹背鏡の読者に白す」、『講苑新聞』、一八八六年一〇月五日。
- ④坪内逍遙「美術論」、五五四頁。